

借景の醍醐味

岩野 節男 埼玉県春日部市 六十五歳

今年も心待ちにしていた新緑の季節がやってきた。なぜかって、美しい新緑をたっぷり眺めることができるからだ。眺める場所は意外にも自宅である。二階に上がる階段の途中の窓とトイレの小窓だ。どちらも普通のガラスではなく型ガラスでしつらえた。そこから見える隣家の柿の木の新緑が眩い。

風が吹くと小枝と葉が揺れ、とても心地よいのである。ぼーっと眺めるだけで飽きることがないのだ。

去年の秋のことである。柿の木のオーナーである隣家の奥さんと玄関先で出くわした。申し訳なさそうな顔をした奥さんが会話の口火を切る。

「いつもごめんなさいね。柿の葉や実がたくさん落ちてご迷惑でしょ。切っちゃおかって思うこともあるんですよ。」

そんな大変な話を切り出された僕は、オロオロしながら、

「そんなそんな、何をおっしゃいますか。実はあの柿の木のおかげで楽しませてもらってるんですよ。」

「……………」

楽しむって何を？と不思議な顔の奥さん。すかさず僕が、

「いや、実は柿の木が窓越しにガラスに映ってきれいなんですよ。特に新緑の季節は最高なんです。だから切るなんてやめてください。落ち葉だろうと実だろうと全然大丈夫ですから。」

僕の願いが通じ、柿の木は今年も無事であった。おかげ様で素敵な新緑の醍醐味を味わえている。これぞまさしく借景である。それでは最後に一句。

「新緑や 窓越しに見る 鮮やかさ」